

# 行事型森のようちえんの現状と課題

—保育内容「環境」における保育実習への活用を目指して—

今村 民子\*・今村 光章

\*大垣女子短期大学

Present situation and challenges of “event type of Waldkindergarten”

Tamiko IMAMURA and Mitsuyuki IMAMURA

## I はじめに

本稿の目的は二つある。まず、行事型森のようちえんである「ぎふ☆森のようちえん」の教育実践に参加する保護者の意識調査について報告することである。次に、こうした野外教育活動を行う任意団体において、①保育者養成校における保育内容「環境」の実習、②幼稚園免許・保育士資格関係の実習、ならびに、③主として家庭科で行われる「幼児との触れ合い体験」での活用が可能であることを示すことである。

本稿で採りあげる「ぎふ☆森のようちえん」とは、2007年4月から、執筆者の今村光章と当時は岐阜大学大学院生であった水谷亜由美（2015年現在、奈良女子大学大学院博士後期課程在学中）が、岐阜市三田洞の「ながら川ふれあいの森」に幼児数名を集めて始めた森のようちえん活動である。創設以来、代表を今村光章が務めており、ボランティア団体として活動を継続している。月に一度だけ活動するこの「行事型森のようちえん」の活動内容については、すでに他の論文や著作で示しているので、そちらを参照されたい（今村 2011a, 今村 2011b, 今村 2011c, 水谷・今村 2011, 今村・水谷 2011）。

この小さな団体は徐々に大きくなり、2014年10月27日現在では、子どもの登録者は、ひかり組（2-5年生）61名、ほし組（1年生）34名、くま組（年長児）32名、りす組（年中児）44名、あり組（年少児）39名、さんぼ組（未就園児）36名となり、合計246名の登録者となった。

ただし、登録者が毎回参加するわけではない。2014年度の1回あたりの子どもの参加者数は、平均120名程度で、登録者の半数である。なお、雨天時に開催した折には、最少で46名であった。逆に、最大では153名が参加した。保護者と同伴で参加するさんぼ組が、毎回、10人（組）程度と参加人数が少ないため、幼児クラスと小学生クラスともに、毎回1クラス約20名程度が参加する。普通の幼稚園や保育所の1クラスと同じ規模の子どもがおり、しかも、1クラスに複数の指導者がいる。

指導者は、現職・元職の幼稚園教諭と保育士、一般市民のボランティア、NPO法人ながら川ふれあいの森自然学校のインタープリター（森の案内人）であり、登録している指導者スタッフは35名にのぼる。筆者の一人である今村民子は2010年ごろから、幼稚園教諭の経験を活かし、ボランティアの指導者として参加し始めた。（なお、蛇足ながら付言しておくが、今村民子・今村光章の両者は婚姻・親族関係にはない。）

この団体とその活動の大きな特色は、保育者養成の実習の場としても活用されてきた点にある。まずは、2009年から、今村光章が岐阜大学で担当する幼児教育課程論、保育学、保育実習、保育学演習I・II、保育学特論の授業において、幼児との触れ合い体験の実習の場として有効に利用されている。また、2011年からは、保育内容の指導法「環境」（担当は宮崎康子：国際日本文化センター）においても活用されている。さらに、後述するように、2012年4月に今村民子が大垣女子短期大学に勤務し

てからは、授業を担当する野外活動の実習の一環としても有効に活用されている。普通の幼稚園や保育所だけではなく、こうした場でも実習が可能であることを示すことが、本稿の第一の目的である。

もとより、岐阜大学教育学部においては、幼稚園教諭を志望する学生らが、自主的にボランティアとして、森のようちえんに参加するようになっていた。最近では、自主的に参加する学生の裾野の広がりはめざましい。これまでに、岐阜聖徳学園大学・同短期大学部、東海学院大学・同短期大学部（以上、岐阜県内）、愛知県立大学、桜花学園大学、至学館大学、名古屋短期大学、南山大学（以上、愛知県）、滋賀大学（以上、滋賀県）、京都精華大学、京都女子大学（以上、京都府）、皇学館大学（三重県）、青山学院大学（東京都）などの多くの大学から、ボランティアとして学生が自主的に参加している。その背景には、森のようちえんを卒業論文のテーマに選び、調査・体験を希望する学生が多いことなど、関心の高まりが挙げられる。学生同士を通じて情報交換をして参加する一方で、ブログや今村光章の著作に触れて参加する学生もいる。手前みそだが、学生の自主的な学びを触発するという意味でも、この行事型の森のようちえんが果たす意義は少なくはない。ときに、岐阜農林高校や岐阜聖徳学園高等学校の高校生がボランティアとして参加したこともある。

このような行事型森のようちえんは、大学と市民のボランティア、自然学校であるNPOが協力して作り上げている団体で、全国的には極めて稀有の存在である。しかも、教育活動にも利用されている。その点について指摘したい。また、これまでは子どもを参加させる保護者の思いを十分にくみ取れていなかった。そのため、本稿においては、先にどのような意識をもって保護者が参加しているかについて調査し、報告したい。そして、こうした活動を活かす布石としたい。そのあとで、今村民子の実施する授業について言及したい。

## II 保護者対象の意識調査の概要

調査対象は、ぎふ☆森のようちえんの保護者である。2014年11月23日の活動日に、ながら川ふれあいの森四季の森センター研修室にてアンケート用紙を配布し、回収した。なお、一部は、メールで添付ファイルにて回収を行った。紙数の都合上、アンケート用紙は掲載しないが、概要は以下のとおりである。

### (1) 属性について

- F1. 森のようちえんに登録しているお子様の人数
- F2. 参加しているお子様の所属
- F3. 参加した回数（昨年4月から今回11月まで）
- F4. 保護者の居住地域
- F5. 同居家族の人数
- F6. 同居している家族の構成
- F7. 父親の年齢
- F8. 母親の年齢
- F9. 父親の最終学歴
- F10. 母親の最終学歴
- F11. 父親の就労時間
- F12. 母親の就労時間

### (2) ぎふ☆森のようちえんに参加していることについて

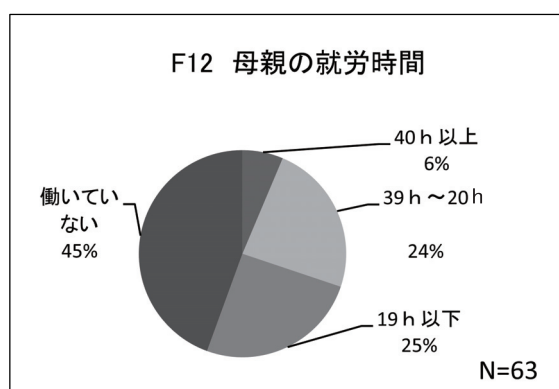
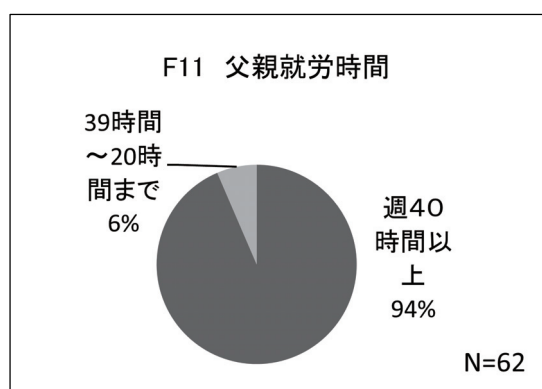
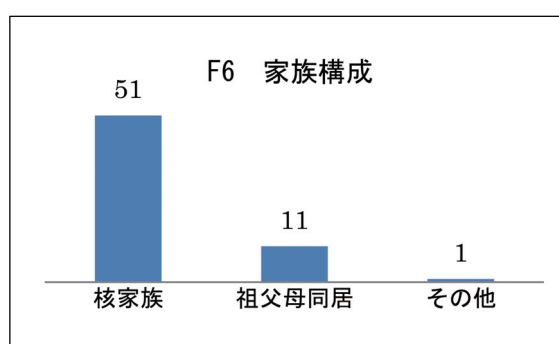
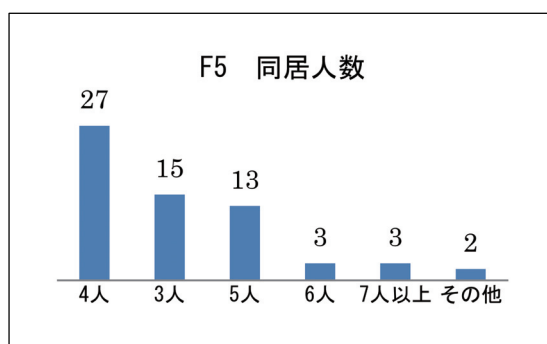
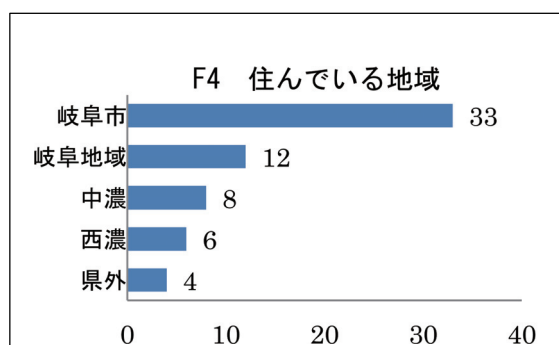
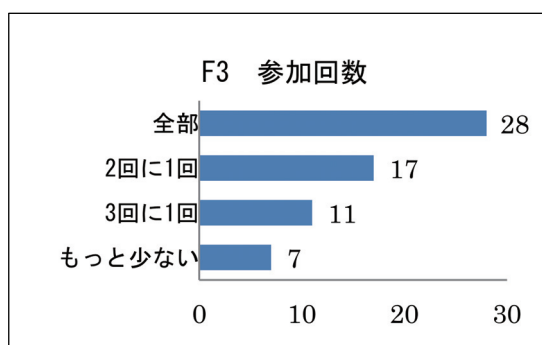
- 問1. 森のようちえんに参加した理由
- 問2. 活動の形—月1回の活動をどのように思うか
- 問3. 活動時間—9時45分に集合して活動し14時30分にお迎えをどう思うか。
- 問4. 参加費—1人1000円で2人目から500円をどのように思うか。

- 問5. 参加費—子ども一人（一人目）につきどのくらいまでなら参加するか。  
 問6. 活動内容で、よかったことや楽しかったこと。  
 問7. 活動内容で、心配なこと  
 問8. 心配なことや気になること（自由記述）  
 問9. 森のようちえん活動でのエピソード（自由記述）

### Ⅲ 保護者対象の意識調査の結果

合計63通（参加している子どもの数は112人）の回答を得た。

子どもの数は、1人が多く28組、2人兄弟が25組、3人兄弟が10組であった。子どもの所属は幼稚園36人、小学校37人、保育所が23人、家にいる子どもが16人で、合計112人であった。



参加回数は全出席と2回に1回を合わせると7割以上であった（F3）。地域は実施地のある岐阜市内と周辺市町が7割以上であるが、県外からの参加もある（F4）。家族形態は核家族が8割であった（F5, F6）。父親の年齢は30代、40代で、わずかに50代もいた。母親は30代と40代であった。父親は大学卒、大学院卒を合わせて7割以上あり、母親も短大卒、大学卒を合わせて7割以上で、大学院卒もあって、どちらも高学歴である。父親は全員常勤の労働をしており、母親は働いていない人が半数

弱で、働いていてもパート労働であり、ほとんどが家事中心の専業主婦であることがわかった (F11, F12)。森のようちえんに参加している保護者の姿は、岐阜市内かその近郊に住んでいる核家族、専業主婦の家族で、両親とも高学歴であることが明らかになった。

次に活動についての結果を示したい。

問1の「森のようちえんへの参加理由」について、10項目の中から一番、二番、三番として3つ選んでもらった。その結果、参加理由として一番多かったのは、項目番号②の「自然の中に子どもを連れていくことはいいことだと思った」である。次いで①「保護者自身が体験した豊かな自然体験を自分の子どもにもさせたかった」、続いて、少し少なくなるが、⑨「森のようちえんに昔から関心があり、興味を持っていた」ということであった。

この結果から、子ども自身が行きたがったり保護者自身が行きたがったりするよりも、むしろ、保護者の意向を子どもに向けているという様子が明らかになった。友達関係で誘われたという人は非常に少なく、所属園（保育所・幼稚園等の就学前教育施設）から勧められた人は皆無であった。また、わずかであるが、休日に子どもを預けたいという理由を挙げた人がいたことにも注目したい。

問2の「活動の形」では、月1回の行事型が8割以上から支持された。問3の「活動時間」では、朝10時に集合して2時半迎えに来ることについて、7割以上が適当であると答えた。問4の「参加費用」については、子ども一人1,000円2人目からは500円がちょうどいいという人が8割弱で、高いと思う人と安いと思う人が1割ずついた。問5の「参加費の上限」では、1,500円までが7割近くあり、2,000円までは約2割であった。参加している保護者は、月1回の形態や5時間半という時間など実施の仕方について満足しており、金額についても現在の状態がよいと思っていることがわかった。なお、付言しておくが、この団体はあくまでもボランティア団体であるため、参加費として集金したお金については、施設使用料や教材費、保険、食費等の必要経費にのみ使用されている。

問6の「活動内容の意義や満足度」について12項目から、一番、二番、三番と順位をつけて、3つ選んでもらった。結果は以下のものであった。まず、①「森の木や虫など動植物に触れることができたこと」、次に③「季節を感じる遊びができたこと」が特に多かった。次いで、⑤「体を思いっきり動かして遊ぶこと」や⑥「五感を研ぎ澄まして感じること」であった。こうした子どもの変化、成長は問9のエピソードで、具体的な様子が描かれている。保護者は自然の中で動植物と触れ合い、体を動かし、四季を感じとって遊んでほしいと期待していて、その通りの子どもの姿に満足していることが伺える。⑧「野外で食べる体験」は、保護者も共に行うことができるものとして楽しみ、満足していることがわかった。

一方、⑨⑩⑫の項目にある友達ができたと関係している人と人の関わりは達成感が少ない。月に1度で致し方ない面もあるが、幼児同士のかかわりをどう構築するか、指導者と子どもとの関係をどのようにして深めていくか、さらには、指導者と保護者の信頼関係をどのように築いていくか、という3点が今後の課題になる。ただし、行事であるために限界もあることを十分に弁えておく必要もあるだろう。

問7の「心配ごとについて」は、①事故、ケガのことと⑤森の約束を守ることの2つが多かった。

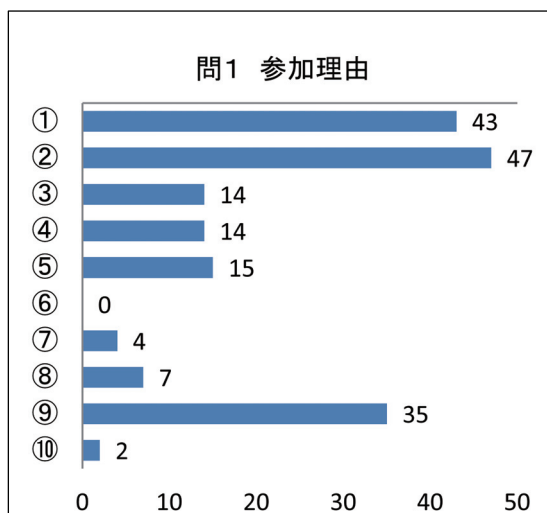
問8の記述から保護者の詳しい気持ちがわかる。

ケガ、虫刺され、動物被害などの安全確保について「熊の出没、へび（マムシ）、猪、木の落下、毛虫にさされないか、葉っぱでかぶれたりしないか」（複数）といった不安がある。だが、「マムシやハチなど毒を持つ生き物にも不安はありますが、森の中ではそういう危険もあるということを子どもと一緒に学んでいきたいと思います」（りす・母）や、「多少の傷やけがについては十分納得しておりますので心配していませんが、命に係わることだけ、起こらなければよいと思っております」（ひかり・母）、など、心配してはいるが、自然の中では当然のこととして受け止める姿勢があることがわかる。

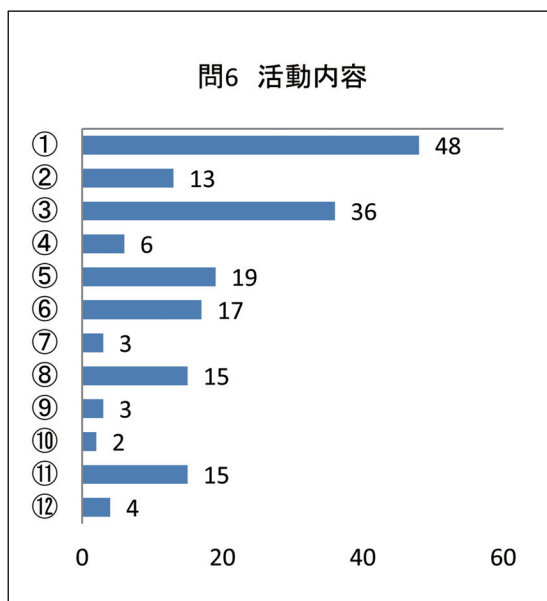
また、友達とのかかわり、トラブルなどについては、「熱中すると周りの声が聞こえなくなるマイ

ペースなどところがあるので、森での集団活動で、熱中しながらも周りとの協調できることを望むが、現状うまく行動できているか」(りす・父)という心配や、「友達とのかかわりができているのか」(ほし・りす母)、「自分の考えや思いが伝えることができるだろうか?新しい友達と仲良くできるだろうか。集団行動するだろうか不安がいっぱい」(ほし・母)という記述があった。

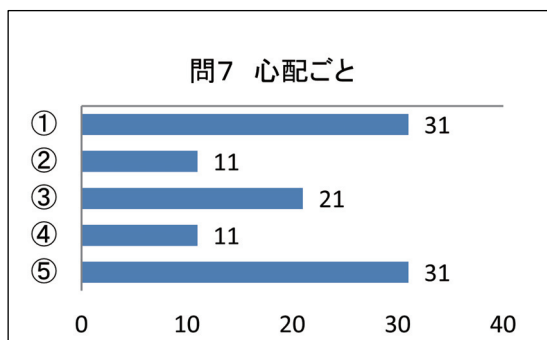
その他の要望として、「お弁当やおやつについてのルールを緩めてほしい」「いつも同じ場所に少し飽きてきている」「森の小学校の今後はどうなるのか」といったものが見られた。



- 問1 参加理由項目
- ①保護者自身が体験した豊かな自然体験を自分の子どもにさせたかった
  - ②月に1回継続的に自然の中に子どもを連れていくことはいいことだと思った
  - ③子どもが行きたがった
  - ④親自身が自然の中で活動したかった
  - ⑤保護者の友達や子どもの友達が行っているので誘われて来た
  - ⑥幼稚園、保育所(園)など所属しているところから、勧められた
  - ⑦関わっている先生から誘われた
  - ⑧本やブログを見て、関心を持った
  - ⑨森のようちえんに昔から関心があり、興味をもっていた
  - ⑩休日に子どもを預けることができる



- 問6 活動内容項目
- ①森の木や虫など動植物に触れることができた
  - ②戸外で長時間(5時間程度)遊ぶことができた
  - ③季節を感じる遊びができた(夏の小川遊び、冬の枯葉など)
  - ④遊具(ハンモック、ネット、ブランコなど設置されたもの)で遊ぶことができた
  - ⑤体を思いっきり動かして遊ぶことができた
  - ⑥五感を研ぎすまして、感じるできるようになった
  - ⑦製作あそびや基地をつくったりした
  - ⑧自分の遊びをみつけて、十分遊ぶことができた
  - ⑨森のようちえんで子ども同士友達ができた
  - ⑩子どもも保護者も森のようちえんの指導者やボランティアさんと仲良くなった
  - ⑪子どもも保護者も野外で食べる体験ができた(サンマを焼く、たき火パンなど)
  - ⑫保護者同士が深く知り合いになって、子育ての話などをすることができた



- 問7 心配ごとの項目
- ①活動中に落下、転落などケガをしないか
  - ②友達とけんかをしてトラブルをおこさないか
  - ③迷子になったりして、集団からはずれたりしないか
  - ④指導者の指導に従うことができているか
  - ⑤森の中の約束を守ることができているか

## 問9 エピソードについて

小学生のほうが親にいろいろと話すためか、その記述は多い。いくつか、代表的なものを取り上げてみよう。

## ① ひかり組とほし組の親によるエピソード

土で手が汚れてはすぐに手を洗いたがる。服が汚れたらすぐに着替えたがる。そんな神経質さを少しでも緩和されなにかと思ひ参加させてもらいました。親と離れるときは何時も泣き初めは心配しましたが慣れてきて本人も成長して、先生のお陰もあり今では随分成長しました。とってもよいきっかけを頂き感謝しております。そして、自然のものにも関心をもち三人とも素朴な子供にそだっていると思います。そして、マシュマロや焼き芋を外で枝をもって食べるのはとびきり美味しいみたいで、家でやる時もフォークがあっても外から枝を拾ってきます。季節ごとに色々自然の事がわかると、葉っぱの毒性のことやどんぐりのことなど教えてくれます。そういう事が嬉しいです。冬に雪が降った時、山の中でもソリが凄く楽しかったみたいで、森のようちえんが終わってからもずっとやって暗くなるまでやっていました。森のようちえんがなかったらあんなに雪のある山に行かなかったと思います。そんなきっかけも有り難いです。(母)

以前、娘が森のようちえんで焼き火パンを食べて帰って来たときのことが印象に残っています。初めてパンを焼いたこと、作り方、今まで食べたパンとは全く違った味がした事等を興奮気味に話してくれました。私たち親に自分の作ったものを食べて貰おうと持って帰ってきた、竹の香りが残ったパンの味と娘のその時の顔と一緒に思い出します。家族でバーベキューをしたり、台所で母親と料理をしたりすることはありましたが、自然の中でパンを一から焼く経験は中々できないので有難く感じています。また、自然を通して子供たちに様々な経験と喜びを与えられるようにしたいと改めて思いました。(父)

昨年、くま組で秘密基地を作った時、活動後に「ないしょだけど、おかあさんに見せてあげる」と連れて行って、自分が「こんなふうの木を置いたよ」「先生にほめられたよ」など、話してくれました。普段幼稚園や学校のことはあまり話さない(楽しんでいないわけではないけど、いつも同じだからかな?男の子だから?)けど、やっぱり、とっても楽しくて話したくて仕方がない様子がとてもうれしかったです。(母)

大好きな虫や自然(植物)を見つけたこと、またそれを指導者の方に見せて話したことを自慢げに話してくれます。私はじっくり聞くことが少ないので、聞いてくれる、また自由に虫取り等させてくれることがうれしいようです。また、森のようちえんの経験から夏休みにNPOグリーンウッドの山賊キャンプに自分から参加する!と言い、単独で参加してきました。さらにこの冬休みも参加します。「自分で考え、自分で決め、行動する」親がいるとむづかしいことですが、森のようちえんを通じて成長してくれていると感じています。(母)

親である私は、岐阜で育ったけれどもあまり外遊びが好きではなく、自然の中で遊ぶことを好んでしていたわけではないのですが、それでも親に連れられて、いやいやではあったけれど山に登ったり、自然の中で過ごす時間があつたことを、今思うと貴重な時間だったということがわかりました。子どもたちにも同じようなことを体験させたいとずっと思っていました。我が家は夫がサービス業で土日は休みでなく、休みも多くて月に3~4日、また子どもたちは私に似てしまい、どちらかといえば家で過ごすことを好むため、アウトドアが苦手な私が一人で子どもたちを自然の中へ連れ出すのは至難の業でした。森のようちえんの活動にはずっと興味を持っており、今年子どもが通う保育園の友人がこちらに入れていただくよう働きかけてくださり、入れていただくことができ、うれしかったです。実を言いますと、子どもたちは毎回、朝は嫌だ嫌だと言っています。でも、終わって顔を見ると、「楽しかった!!」と言って帰ってきます。先日のさんまを焼く回では、長男(小2)は魚が苦手なため、ずっと嫌だ、食べられないとごねていました。受付を済ませても言っているのに、指導者の方に少し手伝ってもらおうようお願いしなさいと言ったところ、自分で頼んでいました。ところが終了後、「さんま全部食べられた!おいしかった!!」と笑顔で帰ってきました。炭をおこし、親御さん、スタッフの方々と一緒に焼いたさんま、格別においしかったのだと思います。私の子どものように、自然の中へ連れていっても進んで遊ぼうとしない子(何をしたらいいかわからないのでしょうか、自分がそうだったのでよくわかります)にとって、スタッフの皆さんが細やかに声をかけて楽しみを見つけてくれるきっかけを作っていただけることがとてもありがたいです。このような活動をしていただいていることに深く感謝します。(母)

あまり、どう遊んだというようなことは、話さないです。ただ、森でとってきた木の実や棒、作ってきた

ものは、嬉しそうに見せてくれます。グミの実は、大量にとってきて、ジャムにして、と言われたのですが、食べてみたらシブくて、作っていません。前回の森では、りす組の長男が鳥の巣を持ち帰りました。とってきたのでは、と心配しましたが、道(?)に落ちていて、鳥の姿はなかったそうです。これで卵を孵すというので、どうやって温めるのか聞いたら、巣に卵をいれたまま、炬燵に入れるそうです。実際にはまだやってないです。子どもの発想はおもしろいなあと、よく思います。(母)

小学2年生の息子が年長の時に、雨降りの中の活動でカタツムリをみんなで見つけました。その時はつかまえていなかったようですが、お迎えの後に私に教えてくれ、そっと捕まえて家に帰りました。大きなカタツムリで、実は今も家で飼っています。継続しないと仲間に入りづらいようですが、予定がないときは参加しています。(母)

## ②くま組の親によるエピソード

かっぱが出るという池に行き、おそなえをした?とかいう話をとてもうれしそうにしている、かっぱの存在を完全に信じきっている様子がかわいかった。次の森のようちえんのときにもかっぱの池に行きたいとずっと話していたのでとてもよく覚えています。どこかのイベントのクイズで、色々な葉の落ち方クイズが出題されたとき、森のようちえんで「どの葉っぱもなげたとしたことがあるからすぐに答えがわかったよ」と話してくれました。・森のようちえんを休んだ月があると、「最近森に行っていないね。行きたいなあ」と言うので、森のようちえんの活動はそれだけ子どもにとって魅力的なんだなあと感じました。・家族で山登りや山菜採りに行くと、「森で習った!」とか言っているいろいろ教えてくれたり、自然をうまく利用した遊びをどんどんやっていて、森で活動しているおかげなのかなと感じました。(母)

はじめの頃は虫に触ることができなかったのに、最近は全く怖がらず、触ったり、サンマは骨までたべられると教えてくれたり、帰ってくると、今日の出来事をたくさん話してくれます。少しずつ友達も増えてきて、交流がひろがっているように思います。(母)

森の親のお手伝いで焼き芋を焼いた時、「お母さんが焼いたやきいも甘くておいしかったよー」って言ってくれた時に普段野外であまりそういう経験がないので、いい経験ができたし、子どもにおいしかったって言ってもらえてうれしかったです。(母) 1

## ③りす組の親によるエピソード

つるの葉っぱで電車ごっこをしたことが、とても楽しかったようで、つるを家まで大事に持ち帰って、家でもお友達と電車ごっこをしたり、なわとびのかわりにしたりしてしばらく遊んでいました。森のようちえんに来なかったらできなかった遊びを知れたり、楽しめたりできてよかったです。(母)

4月から参加させていただいていますが、初日、帰ってきて軽いはずのリュックがずっしり重かったです。中には石がゴロゴロ、食べられる草や、枝や葉っぱがたくさん入っていました。くわしいお話はしてくれませんが、それだけで十分楽しめたことがわかりました。今では毎日曜日が森だと勘違いしているほど森を楽しみにしているようです。(母)

公園で遊ぶのと違って、木に登ることを覚えて「木に登れるんやよ!」と嬉しそうに登って見せてくれ、自信にあふれてキラキラした目をしていたことがあります。また、どんぐりをいっぱい拾っては、家でままごと遊びに使ったり、先日は亡くなった祖母のお墓にも供えていました。そして何よりお迎えに来たときの笑顔はいつも最高です。おもいきり遊んで、「おなかが空いた!」とっています。(母)

平日は幼稚園へ通っていて、楽しんではいりますが、森のようちえんに参加するようになってから「幼稚園は決められた時間内に先生に言われたことをしなくてはいけないので疲れる」と言うようになりました。森の幼稚園では自分で遊びをみつけ、自由に遊べるということが子ども達にとっては、とてもうれしいことのように思います。(母)

いつも森へ向かう時に、山の色を見ながら、「緑がきれいだね」「緑色が濃くなってきたね」「茶色が増えてきたね」など子どもと話しながら、一緒に季節の移り変わりを感じています。普段バタバタとすごしている自分にとっても貴重な時間になっています。(母)

#### ④あり組の親によるエピソード

いつも行く幼稚園はいやだと泣いて行ったりもしますが、森のようちえんは前日から行きたい気持ちを全開です。まだ小さいので当日の様子は「どうだった？」と聞いても具体的に話をするのはむづかしいようですが、時に犬の形をした石など持って帰ってくる時の顔は、とても自慢げです。その顔を見ると私もとてもうれしく思います。自然の中であそぶ時の集中力はすばらしく、家のおもちゃやあそびとは大違いな気がします。担当の先生やお友達のお母さんにも、娘は遊びにとても集中できる、そして何より楽しそうだと言ってもらえることもあり、自然の中で自由に遊ぶ大切さをとても感じています。(母)

森のようちえんでサンマの丸焼きを食べた数日後、我が家でもサンマを夕食に出しました。(魚焼グリルで焼いたもの)すると、年少息子が一言「なんか違うな…」と。「森で食べたやつの方がおいしかったな…」と。すると、祖父、祖母も含めた3世代の食卓でサンマ談義がスタート。「なんで森の方がおいしかったんやろうねぇ」となり、私(母)が子どもの頃は、秋になると外で稲刈り後のワラを燃やしてサンマ焼いたなぁ、グリルで焼いたのとは香りが全然ちがうなぁ、とどンドン話が盛り上がりました。息子は「へー」「ほー」「すごい〜」「やってみたい」と関心を向け、数日後サンマではなかったのですが、畑で獲ったサツマイモで祖父と共にヤキイモを体験しました。おいものにおいをかいで「何か燃えたにおいがする!」と。子どもらしい表現ですが、レンジでチンしたものと違いを動物的に鼻で、いや五感で感じたようです。森のようちえんでの体験は月1で少ないようにも思われがちですが、森と家庭をつないでいく面白さを家族で味わっています。(母)

#### ⑤さんぼ組の親によるエピソード

森のようちえんに行きはじめてから、日々の散歩でも葉っぱや石をみつけては、大事にポケットにしまうようになりました。あちこちに宝物があるのでおでかけが楽しそうです。(母)

11月に参加してテントウムシがたくさんおり、ことばたらずではありますが、その時のことを話すことができました。自然の中でのびのびと遊べる機会があり、ふだんはそんなにたくさんテントウムシに会うことはできないので、よい経験になったかと思います。おもちゃで遊ぶのではなく、自分で遊びを見つけて遊ぶということも、ふだんではできない経験でよいことだと思います。(母)

以上のような現状やエピソードからも、ぎふ☆森のようちえんが、通常の園として、また、園外保育の延長線上にあるような活動として十分に認識され受け入れられていることがわかる。こうしたアンケートでは、学生さんが実習やボランティアで参加することへの不安は一切書かれていかなかった。したがって、保育の実習の場として活用しても問題はないと考えられる。

## IV 大垣女子短期大学での実習生の感想

大垣女子短期大学幼児教育科で3年生対象に開講されている「野外活動」は、幼児教育科の専門科目のうち、専修科目(総合)として前期授業に位置づけられている。

授業方法は、1回目は事前オリエンテーション、2回3回4回が森のようちえんに参加実習、5回目が事後反省である。5回を1クールとして、4月から6月まで、3回森のようちえんに参加した。

学生が参加するのは年少のあり組である。あり組の4月から6月は、保護者同伴で森を楽しみながら、子どもに学生が1対1で対応する。いっしょに遊ぶうちに学生と親しい関係ができ、少しの時間保護者から離れて自然の中で遊ぶ時間を持つことができるような願いを持っている。学生は保護者支援という観点から親子のかかわりを大切に、自然という環境の中で子どもと共に楽しみを共有しながら、子どもの心に寄り添うようにしている。

以下では、学生の感想をもとに、どのような学びがあったのかを簡単に確認したい。



学生WY 5月（2013年）の記録から

お父さんときたS君と一緒に薬木の広場まで行きました。S君は自分からあまり話そうとしない様子だったので、歩きながらもの巣を見たり、木を見たり、説明が書いてあるプレートを見たりしながら向かいました。一方的に私が話していましたが、「木、大きいね。なんていう木かな?」「あっ、〇〇もあるよ。」などとS君が周囲にも目を配ることができるように言葉かけていくと、少しずつ話す回数が増えていきました。途中で大きなたんぼぼを見つけ「お父さんにあげる」と言いました。摘もうとしたとき、みつばちがとまり、花粉をいっぱい集めている様子が見れました。近くに行ってその様子を観察しました。「みつばち何しているのかな?」「足にいっぱい黄色いものをつけているね」と言葉をかけました。その後、へびいちごを見つけてお父さんに渡していました。

毛虫、ムカデもたくさんいたのですが、毛虫は動きもゆっくりなので観察できると思い「毛虫さん何色かな?」と問いかけると、子どもたちはきちんと自分の目で色を見て、「オレンジ色と黄色と…」「黒色!」のように言うことができました。綺麗な色にひかれ、触ってしまうこともあるので、「きちんと毛があるね」「あれに触るとかゆくなるからね」ということも話しました。

このような記録から、いっしょにいるお父さんにもみせるといふ、あり組の子どもが初対面の学生といっしょにいる心細さを受けとめながら、たんぼぼ、木、ムカデ、毛虫の動植物に子どもといっしょに注目して観察しながら言葉かけをしている。自然物への共通の興味から、緊張が解けていく様子がわかる。

学生WY 5月（2013年）の記録から

ネイチャーゲームをしている時に葉っぱをみて

ネイチャーゲームは顔文字を使って自然の物に貼るといふものでした。お母さん方に「難しいですね」と言われてしまいました。顔文字はイメージが持ちにくいとの意見がありました。しかし「葉っぱが虫に食べられてるから、泣いているんだよ」といふ子どもの話を聞いてすばらしい発想だと思いました。自然の中で遊ぶといふことは想像力を豊かにするんだなと気づくことができました。

このネイチャーゲームについては、次のような保護者の記述もあった（問9）。

「年少組時の体験遊びの際、表情シールを何かに貼り付けて気持ちを表現しようといふ遊びを行いました。当時は感情（喜怒哀楽）の表現表出にも乏しく、言葉も拙かったため、どこまで気持ちを“コトバ”で言い表すことができるのか心配していました。案の定、始まりの合図と共に次々にモノを見つけたり、親子で話し合う様子に戸惑いながら、足元をじっと見つめる子どもを促すことをせず、ひたすら”自ら動く“ことを待つのは時間を要しました。意を決して足元の枯葉を拾い上げ、”微笑“のシールを貼り、満足そうな顔をした子どもにどんな気持ちだったかを聞くと『拾ってくれてありがとう』（と言った）と伝えてくれました（母）」

両者は、大人である保護者や学生は難しいと思っけていても、自然に興味を持つ子どもは、穴のあいた葉っぱや枯れ葉にまで心を寄せて、お話することができるといふことを示すエピソードである。子どもは空想と現実を自由に行き来することができて、想像する中では何とでもお話できることを、学生は学びの中で心得ているはずであるのに、実際に教えられたのは学生の方だったようだ。また、保護者はその言葉の新鮮さに感動されている。ネイチャーゲームといふ大人からのしかけ遊びをすることで、豊かに自然と交わることができていた。

学生SM 4月（2014年）の記録から

タンポポ広場で親子が自由にタンポポ笛で遊びました。年中組の先生から鳴らし方を教えてもらい、挑戦するとだんだんコツがわかり、いろいろなリズムで鳴らせました。子どもたちも興味を持ってきてくれて、

コミュニケーションをとりながら練習をしました。息の加減や唇のコツによって変わってくるため、保護者の方も必死でした。子どもの方が早くできる子が多いことに驚きました。

この時、広場にはタンポポが一面に広がっていて、あり組親子やりす組の子がいっぱいたんぽぽ遊びを楽しんだ。学生は1年前期の環境の授業でたんぽぽ笛を体験していたが鳴らすことができなかった。今回の再挑戦で子どもといっしょになって挑戦して鳴らすことができ、学生自身が子どもになって喜んでいて。そして、保護者とかかわりやその様子を観察することも忘れずする中で、子どもたちが大人よりも先に習得していくようすに自然物遊びの楽しさや自然の中で得られる有能感を体験しているように考えられる。

## V むすびにかえて

前述したように、ぎふ☆森のようちえんという行事型の森のようちえんは、全国でも珍しい。また、それを授業で活用できるということも稀である。本稿では、その点を再確認するとともに、見逃されつつあった保護者の意識が調査できた。また、参加する学生の感想も概観することができた。

ただし、ごく一般的に言えば、森のようちえんは、正規の幼稚園や保育所ではない。また、園舎や園庭がない。とりわけ、行事型森のようちえんにおいては、参加する幼児たちもその場その場限りである。しかし、そうした特別な場所でしか出会うことができない自然豊かな環境が存在する。まずは、学生たちがそうした場に出かけることが大切である。加えて、年少のあり組では保護者と共に時間を共有するという子育て支援の場所にもなっている。一見実習の場になりにくいように思われるが、学生は子どもに出会うばかりではなく、自然環境を子どもと共に体験して保育技術を高めることができる。また、自然の中で共に遊びながら保護者とかかわりも持つことができている。こうした場は実習として意義深い。

保護者たちの大半は、豊かな自然が生活場所に身近にあると思われる岐阜市あるいはその近郊に住んでいる。だが、すでに保護者自身が自然の中で遊ぶにはどうしていいかわからない世代になっている。だからこそ、わが子を森のようちえんに参加させて、子どもに自然の中の遊びを経験させたいと願っている。多くのボランティアの指導者のおかげで、また、そうした場所を実習として活用することに理解を示してくださる岐阜大学や大垣女子短期大学のおかげで、子どもの自然体験が深まっていく。私たちは、子どものためにも、また、そうした保護者の期待に応えるためにも、今度ともこうした活動を続けていきたい。

### <註>

- ・今村光章, 2011a, 行事型「森のようちえん」の実践とその意義, 関西教育学会 年報通巻第35号, pp.111-115.
- ・今村光章, 2011b, 森のようちえんとは何か:用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐって, 日本環境教育学会, 環境教育, 21(1), pp.59-67.
- ・今村光章, 2011c, 「森のようちえん活動をはじめました」, 今村光章『森のようちえん:自然のなかで子育てを』, 解放出版社. pp.10-27.
- ・水谷亜由美・今村光章, 2011, ドイツの森のようちえん活動の実際: Waldkindergarten Bensheim.e.Vを訪問して, 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究, 第13巻, pp.109-118.
- ・今村光章・水谷亜由美, 2011, 「森のようちえんの理念の紹介:ドイツと日本における発展とその理念を手がかりに」, 日本環境教育学会, 環境教育, 21(1), pp.68-75.